

## 〈「原主水を称える会」主催 当日現地見学資料〉

### 2015年11月1日（日）手賀の旧教会堂と原氏ゆかりの旧跡巡礼

案内：[藤 由美](#)

千葉県有形文化財の旧手賀教会堂は、首都圏最古の教会堂で、山下りんのイコンがありました。

この教会堂のある台地には、偶然ですが、臼井城主原主水とも縁戚の手賀原氏の城跡や墓地があり、手賀原氏の末裔の原胤昭もここに眠っています。

江戸町奉行与力だった原胤昭は、祖先の、「元和の殉教」で刑死した原主水の信仰に深く感銘し、明治維新後のキリスト教解禁とともに洗礼を受け、日本初の監獄教諭師をつとめ、囚人たちを保護して「免囚保護の父」と呼ばれました。

今回は、山下りんのイコンのある旧手賀教会と、手賀原氏の城址と墓地を訪ねて、巡礼を行います。

#### 巡礼のポイント

##### 1. 旧手賀教会堂と山下りん画のイコン

正式名称を日本ハリストス手賀教会（手賀使徒伊望正教会）といい、ギリシャ正教の教会で、現存する首都圏内の教会堂としては最古のものです。

明治6年にキリスト教が黙認されるようになると、ニコライ大司教により日本ハリストス正教会の布教活動が北海道函館より始まりました。

千葉県には明治8年法典（船橋市）、同10年大森・船穂（印西市）、布佐（我孫子市）にそれぞれ教会が設置されました。大森教会での布教を知った手賀、布瀬地区の人々は、明治12年に教会を創立し活動をはじめ、同16年に教会堂を設置しました。これが現在の旧手賀教会堂で、明治30年頃聖堂部分が増築されています。

ここには、茨城県笠間市出身の明治期の女流作家として高い評価を受ける山下りんの描いたイコンが掲げられていました。イコンは、主全能者（キリスト）、至聖生神女（マリア）、機密の晩餐の3点ですが、現在は近くの新手賀教会堂に移され、旧教会堂にはレプリカが展示されています。

（非公開の新手賀教会堂は、年数回の礼拝時に開扉されます。）



##### 2. 「手賀 原氏」とは

千葉の名族の原家は、天正18年（1590）に臼井城主原主水胤信の代に秀吉軍の侵攻により開城、千葉氏の旧臣と共に、幼少の原主水も徳川家に召し抱えられ旗本となりましたが、キリスト教に入信し元和9年（1623）に殉教して、原氏宗家の嫡流は廃絶となりました。

原氏一族には、宗家の臼井原氏のほかいくつかの庶流があり、手賀城に拠った手賀原氏の初代胤親は、臼井城主の原上総介胤貞の二男とも伝えられています。元和 3 年に 3 代当主の兵右衛門尉胤次は江戸町奉行与力となり、13 代胤昭の時に明治維新を迎えます。

### 3. 手賀城跡

手賀沼を見下ろす台地の突端にあり、主郭であった畑内には、昭和 37 年に建てられた「手賀城址」の石碑があります。

南側の興福院の境内は、II 郭であったと考えられ、興福院は廃城になってから移されてきた古刹で、千葉一族が信仰した妙見像と、その本地仏とされる十一面観音が伝えられています。



### 4. 手賀原氏の末裔 原胤昭（はら たねあき）

十三代手賀原氏当主、嘉永 6 年（1853）江戸八丁堀の与力佐久間家に生まれ、14 歳で母方の原家を継いで南町奉行与力となりますが、維新後の明治 7 年（1874）築地大学校で英語とキリスト教を学び、東京第一長老教会でカロールズス師から受洗しました。

明治 9 年女子学院の元となった原女学校を開校、またキリスト教書籍販売の十字屋を開店しましたが、自由民権運動家を弾圧した福島事件を風刺した錦絵を出版したことから明治 16 年、政治犯として石川島の牢に投獄されました。

この時の牢獄での虐待や劣悪な環境を目のあたりにして、出獄後は監獄の環境改善や、出獄後の元囚人の社会復帰の手助けをすることを決意し、自宅を免囚たちの保護所とし、また積極的に囚人の保護と免囚の自立更正にあたり「免囚保護の父」と呼ばれました。

### 5. 原主水の生涯に感銘した原胤昭

原胤昭著『隠れたる江戸の吉利支丹遺跡』の「はしがき」から

「額の烙印、それは私の頭脳を寸刻も放れない印象なのだ。私は格別な神の恩寵を受けて、明治の初年に早くも基督のお召を蒙り小さき僕とせられ、微力を出獄人の保護に致して四十有七年、約一萬の同胞に友となり仕へた。（中略）

折しも私の眼を射た輝きは、関東に於ける吉利支丹殉教者の巨頭原主水の血潮、實にジョアン主水が額に焼込まれた十字架の烙印である。年代はたとへ遠く隔たるとも、一河の流を汲む聖者主水の血族胤昭を、開國維新の明治初代、大衆に先んじ召して基督の僕となされ、之を鞭うち、民権首唱の行動に導き、暗らき牢獄に打ち込み囚徒の痛苦を體驗せしめ、世に便りない前科者同胞を保護する一人者に使い給へるは、何たる神の恩寵であらう、私には筆にも詞にも此の歓喜感謝は云ひ盡はされない。」

### 6. 手賀城主原氏墓地「御墓場（おほかば）」

①江戸時代に手賀城主原氏ゆかりの人々を供養した墓塔 7 基と、②原胤昭とその家族の墓 5 基、③胤昭が保護した出獄者で引き取り手のない 53 人を埋葬した墓碑 8 基や小さな墓石群があります。

①の囲いの中の右側の一石五輪塔 2 基は、元和 7 年（1621）に、江戸町奉行組与力となった原胤次が建てた両親の供養塔、中央は鱒ヶ崎の総名主が旧主の原氏のために建立した供養塔、②の十字架の墓碑は胤昭の子で夭折した萬胤の墓、原胤昭の墓石は左側白色 3 基の真ん中で、近衛文麿筆で「原胤昭之墓」と刻まれています。

## 〈報告〉

### 11月1日 手賀巡礼-山下りんのイコンと手賀原氏の旧跡を訪ねて

蕨由美

諸聖人の祝日の11月1日、十時のミサのあと、「原主水を称える会」の呼びかけに参じた十名の方々と柏市手賀を巡礼しました。

手賀沼畔の手賀の丘には、原主水の縁戚の手賀原氏の城跡と、その子孫でキリスト者として囚人保護に尽くした原胤昭の墓地があり、また、山下りんの聖画があった首都圏最古の教会堂も残されています。

船橋学習センター「ガリラヤ」でのアンドレア神父様のイコンについての講座に関連して、八月一日にも匝瑳市のハリストス須賀正教会を拝観したばかりでしたので、手賀の正教会訪問も楽しみでした。

車三台に分乗して、まずは、臼井城主原氏の庶流（分家）であった手賀城主原氏の「お墓場」へ。ここには、戦国時代の終わりに小田原の北条氏とともに滅んだ手賀城主の供養塔や、その子孫の原胤昭のお墓があります。

手賀の原氏は手賀落城後、江戸の町奉行所与力となり、明治維新を迎えますが、最後の与力であった原胤昭は、明治初期にいち早くキリスト教に入信し、一生を囚人や出獄者の保護に捧げました。その原胤昭の信仰と活動の原点は、臼井城主として原一族の当主でありながら元和の大殉教で処刑された原主水の生涯とその信仰に触れたことでした。

原胤昭はその著書で、「折しも私の眼を射た輝きは、関東に於ける吉利支丹殉教者の巨頭原主水の血潮、実にジョアン主水が額に焼込まれた十字架の烙印である。年代はたとへ遠く隔たるとも、一河の流を汲む聖者主水の血族胤昭を、開国維新の明治初代、大衆に先んじ召して基督の僕となされ、之を鞭うち、民権首唱の行動に導き、暗らき牢獄に打ち込み囚徒の痛苦を体験せしめ、世に便りない前科者同胞を保護する一人者に使い給えるは、何たる神の恩寵であらう、私には筆にも詞にもこの歓喜感謝は言いあらわされない。」と述べています。

原胤昭とその夫人のお墓の後ろには、胤昭が埋葬した出獄者たちの小さな墓石も並んでいます。私達は、原胤昭の墓前に花を手向け、聖歌「みもたまも」を歌って祈りました。この日は「諸聖人の祝日」、翌日は「死者の日」でしたので、明治の先覚者の墓前での祈りは、この日にふさわしい巡礼の始まりになりました。



昼食を近くの「手賀寿し」でいただいた後、ハリストス正教会の**新手賀教会**を訪問しました。

千葉県指定文化財になっている山下りんのイコン三点が祀られている教会堂で、ここをお守りしている信徒の方に特別にカギを開けていただきました。ここは元小学校の跡地で、四十年前に旧教会堂から移転し、六軒の信徒が信仰を守っておられます。

教会堂内で、山下りんが描いた「至聖生神女」（聖母マリア）の絵に接して、そのやわらかで繊細な筆跡に感動し、皆で聖母にささげる歌をうたって祈りました。



続いて、**旧手賀教会堂**を見学。民家を明治十六年に教会堂にした茅葺きの建物で、今は、柏市所有となり、千葉県有形文化財に指定されています。

二間ある座敷には、山下りんの三枚の聖画の写真が展示され、その奥は至聖所になっていて、アーチ型に十字の棧の入った窓ガラスからは、外のピラカンサスの赤い実が陽に輝いて見えました。



旧教会堂見学の後は、原氏が扱った**手賀城跡**を探索しました。

城郭内の迷路のような道から、「手賀城址」の石碑のある畑を抜けると、そこは主郭（本丸）の先端で、手賀沼や筑波山が一望できました。

最後は、手賀城下の**兵主八幡神社境内の馬場跡**を見学。かつて原家の武士が馬を馳せたであろう馬場に立ち、晩秋の陽の斜めにさす並木道を眺めながら、今日一日、天候に恵まれて充実した巡礼になったことを感謝し、午後三時過ぎに解散しました。

